

## 半眼魔王の奇抜な数奇求愛

——木村聡雄『いばら姫』の句境

木村聡雄著『いばら姫 Little Brier Rose』ふらんす堂 平成  
二二年八月二六日発行 二五七一円（税別）ISBN978-4-  
7814-0249-9

Junichiro TAKACHI

高市 順一郎

木村聡雄のハイクは、季語を守り、定型に固執する月並俳句とは丸つきり反対の、型破りの綺想を遊ぶ、自由奔放な数奇の樂園、異界そのものである。

彼のハイクを初めて見たのは、九月二七日、第七六回国際ベ  
ン東京大会二〇一〇の、俳句セミナリーの打合せに京王プラザ・  
ホテルで会った折、第二句集『いばら姫』をもらい、帰り途の  
電車の中で頁をめくった時だった。そして、いきなり眼に飛び  
込んだ、反語のマスクをかぶった、逆説の勃起表現―次の  
二句に撃たれ、嘔然としてしまった。

喪失の尾とひきかえに詩の一行

表現されず記憶されずに真空詩片

聡雄は、初手からメフィストフェレスに正気を売り天才のひ  
らめきを買った魔王のように、「夢魔」を装い、斑気の「鬱血」  
の火花の綺想にこそ、必然性ある「詩行」があるとの見栄の手  
形を乱発してはばからない。

喉彦を振り震わせて夢魔来たり

魂のこの鬱血も魔王に売る

蛻蜴よこれが偶然という詩行

このまがまがしさは、文学者の知の節操も、芸人の節度もか  
なぐり捨てた、ボードレールの「スプレーン（鬱気忍）」が敢行し  
た反逆としての詩「悪の華」か、その反揚転の自任「俳の魔王」  
の「躁質」が発揚したへ文学は爆発だへの仕掛火花なのかも知  
れなかった。

この聡雄の示威行為としての俳諧の躁揚言の効果は、てきめ  
んと言えた。いつもは沈着深慮の老学者詩人の高市も、彼の仕  
掛火花の煥発に煽られ、翌日の「俳句セミナリー」で話す予定の  
「芭蕉の（風雅）と（奥の道）」に倣って―目に花の像、心に華の  
思いのレハーサルも忘れ、一夜独りサバトのハシカにかかり、  
その夜のうちにへ一期一会へ変じてのへ一語一得へのコンシー  
トをめぐる、六連の利那俳詩「兎―黄色の歌」を書き散らすほ  
ど「あやしふこそ物狂ほしけれ」の嬌態を演じていたのだった  
から――。（その初句と終句を掲げておく）

一華一見岩なる兎太陽も独り

翁兎きのう死に今朝一絵啓く

われらの魔王聡雄は『いばら姫』の「後書き」で、この禁書  
が恩師高柳重信氏が与えてくれた、現今の「俳句の保守化の状  
況」に対し、進んで「独自の方向」を拓き、「未だ書かれたこと  
のない俳句表現を求める旅」に出るがよいとの勧めに沿って書  
き始めた作品であり、今回の出版は「究竟の画家金子國義氏に  
よる装丁を以て形あるものとなった」と記している。

傑作は、その金子氏の、巻頭を飾るペン画「いばら姫」であ

る。それはグリム版「いばら姫」の山場のシーンを詳しく語るC・ペロー版「眠りの森の美女」の、勇敢な王子の口づけを受けて目を醒まし、「あなたなの、王子様？ずいぶん長い間お待ちしましたわ」と百年の眠りの呪文から起き上るチャーミングな「眠り姫」とは大違いの、ブリュエルの「天国と地獄」をポール・デルヴォー風にパロディー化した白昼夢的なサバト絵で、マドンナがコルヌコピア（豊稔の角杯）のペニスの喇叭を吹き、長いミュール貝のワグナを舐め、エロスの乱痴氣に酔う逆メルヘン図であり、どうやらこの放埒無稽の多饒の楽園図に集約された、パリ遊学中に感染したに違いないネルヴァル流のデカダン耽美主義とナボコフの「ヘロリータ・コンプレックス」の発熱、発情こそ、われわれの魔王が因襲に謀反し、反旗を翻えず起因となつた、重大モーメントに違いないと思われるのである。

忌詞連ねてもはや十七文字

定型感覚うすらぐばかり黙字転る

写真より出でて真珠のゆがむまで

光輪を光背にして超伝統

これこそ、聡雄ハイクの身上、革新のオーラ、反伝統の華である。「忌詞」とは、「魔王に売った」俳諧エスプリの代償の「偶然という詩行」であり、「真珠のゆがむまで」とは、「定型」の器を壊すことでバロックなヘデコンストラクションの新詩学を逆構築しようとする新取の句法というものだろう。

グリム兄弟の「いばら姫」は、ペローの「眠り姫」と同じ様に、誕生日のお祝いに、七人の善良な魔女（妖精）たちから「世界一の美」「天使の気立て」「優雅」「踊り上手」「音楽の才」等、七つの「天賦の才」を授けられる。授けられなかったのは

「知恵」だけであるが、姫は全美徳と「善良さ」ゆえに、死の宣告を百年の眠りと夢見に変えることが出来た。われらが数奇魔王がハイク探求の旅出のはなむけに、天から贈られた賜物は何だったか。それは詩の豊稔の角杯へコルヌコピアであり、何よりも豊稔のイメヂをニュートン的な「新機関説」の出し物に変える発明の「才知」であると見られる。すなわち、一句一会の作品に、真正な答を出す古典的なヘコンコルデア・デイスコルス（調和の詩学）より、それを逆転させたヘデイスコルデア・コンコルス（不協和の詩学）の方、つまり尻切れトンボでも無解答の解答でもいいから、エロスの多饒な横溢イメヂ、数奇の求愛キス一つだけで一行の詩を成り立たせ得る、確信判的「誤読」の力が、それである。

鏡 よぎる幻影おびき出せ 鏡

聖杯の底乾くことない誤読

半眼魔王の聡雄が、山頭火のように一本の一語一生の完全自動詞で、風のように木のように、一行の詩に立つ日が来るまでには、しばらく時間がかかろう。

彼が今一番たよりにしているのは、「眠り姫」のように百年の呪いのかかった眠りの中に、百の夢を叶えることができる「夢見る力」である。夢幻であれ夢想であれ、彼は超現実を想い、イメージできる夢見る神通力を備えている。

因われの妖精 造花へ花変化

言霊を語り部として闇へ漕ぐ

おそらく、額から笥の勢いで勃起する、天狗のようなヘコルヌコピアの華の向こうあたりに、「未だ書かれたことのない俳句表現」が啓かれることになる道がありそうである。